
学園レイ

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園レイ

【Zマーク】

Z5009Y

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

佐藤茂は転校先の学校で怪奇な事件に遭遇する。茂は新しくできた仲間と屋上限定の女幽霊と共に奇怪な事件に挑む……！

?

学園に靈の話が出てきたのは、佐藤茂が転校してきて直後のことだつた。当時彼は新しい学び舎に慣れていなく、友人も少なかつた。隣にいた橋奈央が唯一の話相手だつた。その彼女がだんだんと邪険になつてきたとき、そんな噂を耳にしたのだ。それは茂が腹痛に襲われてトイレの個室に駆け込んだときだつた。風邪気味だったからか、軟化した便が勢いよく出てきた。尻を拭いて便を流す。すつきりした。学校のトイレで大便をするという行為は嫌なものだが、この狭い個室はなんとなく落ち着く。前の学校とは違い、ここは洋式で、落ち着いた空間になつてゐる。それでもどこか汚いイメージのある場所に用を終えてから長居はしたくない。ズボンを上げ、出ようかと思つたら誰かが入つてきた。一人組みのようだ。小用を足しにきたのだ。尿を便器に流しながら喋りあつてゐる。たわいのないことを話してゐる。茂は出るに出られない。知つた顔ではないかもしないが、大便をしたということをばれたくない。

「知つてるか？ 最近、校舎に女の靈が出るらしい」

茂の耳が反応した。

「ああ？ 何だよそれ」

「だから靈だよ靈。女の靈が出るんだつて。結構見たやついるんだよ。うちのクラスのやつだつて見たつていつてるし」

「ぐだらねえ。俺、靈なんて信じないよ」

「どうでもいいけどね、お前如きが信じる信じないは」

二人組はトイレを去つた。残つた茂は少し間を空けて個室から出、外廊下に出た。今的一人の会話を思い出す。馬鹿らしい、と思うが、なんとなく氣になつた。靈というものがいるとしたら、見てみたいもだと前々から思つてゐた。学校の靈か。どうせ何かを見間違えて、話に尾ひれがついたんだろう。結局すべての事柄に説明はつくものなのだ。

クラスに戻ると佐藤蓮華が話しかけてきた。蓮華という変わったといふか、妙な名前を持つ彼は茂の新しい学び舎の、数少ない話相手の一人だ。橘奈央とは反りが合わないようで、彼女と茂が話しているときはこちらには近づかない。名前こそ変わっているが、『ぐくごくありふれた平凡な生徒だ。顔も、体つきも。性格も地味で、ゲームが趣味。

「どこいったんだ?..」

「ちょっと催して。トイレだよ」

蓮華はにやりとした。

「何?」

「いや茂は度胸あるな。一人でトイレなんて。俺ちょっと怖いよ」

「何が怖いって? たかがトイレにいくくらい」

こいつは小学生かと茂は呆れた。

「最近の噂知らないわけじゃないだろ? 靈だよ」

なるほど合点がいった。しかしそれにしても……情けない。

「幽霊なんていないよ」

蓮華の顔は深く、暗かつた。

「わからないよ」

それだけいふと、蓮華は茂から離れていった。茂のよく知らない仲間たちの輪に合流する。

茂はどこか変な蓮華の行動を考え、そして靈のことを考えた。ちらりと横を見る。橘奈央は澄ました顔で携帯電話をいじっている。じつとみてみると皿があつた。

「何よ?」

奈央の顔は窓から射す光によつて輝いて見えた。茂はふと思つた。奈央のことが好きなのかもしれない。奈央は……可愛いかもしれない。白さの中に赤みがかかる淡い白色の肌は美しかつた。

「幽霊って信じる?」

「馬鹿じやないの」奈央は再び携帯をいじりだした。

女子ではこんなのが話す相手がないのだ。まったくもって切ない青春だ。せっかくの高校生活だとのに、彼女どころか友達すらまともにできずに終わるのだろうか。憂鬱な気分になる。幽靈よりも、辛い現実のほうが怖い。

「でもみんな噂してるじゃん」再び奈央に話しかける。

「茂君は噂話をいちいち本気にするの？」

「そうじゃないけどさあ、でもほり、火のないところ……」

「そういうのきもいからやめて」

茂の言葉は途中で遮られた。

「何が？」

「ことわざみたいなの。『つざわ』」

茂は面食らった。この程度でつざわい呼ばわりだ。

「慣用句くらい使つてもいいじゃんよ」

「気持ち悪いの。お願いだから死んで」

死ぬかよと茂は心の中で思った。奈央はまた携帯をいじりだした。どうやら自分は奈央に受け入れられてないらしい。生理的に受け付けない、といつやつだろうか。友達もない。隣の席の娘は冷たい。いいところなしだ。

?

学校が終わると自転車で家まで帰る。家からけはせほど離れていない。今日も退屈な日だった。明日もそうに違いない。家に帰りゲームをしながら、隣の席の女子に好かれる方法を考えた。やはり、一人で孤独でいるのが薄気味悪く思えるのだろう。

だけど死んでは酷くね？

結局もやもやした気分のまま夜を明かした。

次の日、憂鬱な学校を休もうかと思ったが犬が元気なのでつい登校した。飼っているマサヒトはなかなかに愛嬌のある雑種で、愛くるしいその姿を見ていると気分がよくなつた。自分でも単純だと思いつながら自転車をこぎ、そしてクラスにきてまわりが騒いでいるのを見ると途端に憂鬱になつた。お前ら何がそんなに楽しくて生きてるんだ？ 席に座る。隣には奈央の姿はない。どこかで女子たちの輪に入つているんだろう。

不気味なほど退屈な時間はホームルームが始まるまで続いた。今田は蓮華もこなかつた。

蓮華とは話す相手ではあるが、プライベートで遊んだことは一度もない。

昔の友人に頼ろうとかと茂は考える。が、別の県に転校をした彼に頼れる者はいない。小学校、中学校の仲間とは疎遠だった。ため息しかでない。死ぬほど退屈で孤独だ。

昼休みがくる。なんとなく、屋上で食べてみたくなつた。なので弁当を持って屋上へ。屋上の階段を上がる途中、不良とすれ違つた。名前は知らないが、同じ学年のやつだ。金髪で田つきが異様に悪い。まるでこの世の全てを否定しているような、悪鬼のような田だ。背も高く体もしつかりしている。喧嘩したらまず勝てないだろう。風を切るように階段を下りてくる。

「よお

「やあ」

とつをのじとだつた。その不良学生に挨拶されたよつなのでそつ返した。驚いて振り返ると、その生徒は振り返ることなく悠々と階段を下りていつた。

大した意味はないんだろう。一人だけでいるやつに挨拶しただけだ。だけど……だけどこか新鮮で、嬉しい気持ちがあつた。屋上にきてみるもんだなと思つたりもした。

そして次の日も屋上へ。日は照つていて、風が強く吹いていて逆に気持ちよかつた。町を見下ろしながら弁当を平らげる。悪くない。教室よりもずっと気分が落ち着く。

「やつほつ」

誰かに声をかけられた。振り向くとそこには女性徒がいた。黒々とした黒髪を三つ編みにした少女が一人、ここやかな笑みを浮かべて立つている。

一度にいろいろなことを思った。

この女、ここで何をしているんだろう?

結構可愛い子だな。睫がずいぶん長い。鼻は高いな。
女子にしては背高いな。俺と同じくらいか。
いい太ももだな。パンツ見えないかな。

「どうも」控えめな挨拶を返す。

「こんなところで何してんの?」

女が何者なのかわからぬ。クラスの女子全てを把握しているわけではないが、こんな女子はいなかつたはずだ。そこそこ、いやかなり可愛いし、すぐに気づくはずなのが。

「外の風に当たりたくない」

「ふうん。でもちょっと風強すぎると思つよ」

「えつと、よかつたら名前きいてもいいですか?」

相手が年上とも限らないから敬語で尋ねる。

「私? 河添薰かわぞえかおるだよ。知らない?」

知らない。誰だよ。

「薰ね、ずっとこの屋上にいるんだけどね。昨日も君いたよね？
ちょっと一人でさびしそうに見えたよ」

昨日いた？ 昨日は不良とすれ違つたけど、屋上には誰もいなかつたはずだ。

「昨日は俺一人だと思つたんだけど」

「いたんだよ。姿隠してたからわからなかつたよね。結構臆病だから、私」

ふうんと茂は思つ。姿を隠すつていうのがなんとなく滑稽で笑えたが、顔には出さなかつた。

「君は何年生なの？」

「一年生です。あ、俺、佐藤茂つていいます。薰さんは三年生ですか？」

これで一年生だつたらなんだか恥ずかしいなと茂は思つ。
「あたしは三年生だよ。もつとも、それはあんまり意味のないことだけだね…」

どうこうことだらう。学年よりも経験がとかそういうつまらない意味だらうか。

「薰さんもこゝで食事を？」

「食事つていうか、こゝがあたしの全てだから」

よっぽど屋上が好きなんだろうと茂は解釈した。しかしこの人はなんでこつちに話かけてきたんだろう。嬉しさの反面、戸惑いも感じる。

「昨日は不良君もこゝに遊びにきてくれたんだよ。章吾つて名前なんだけど、彼、普通じゃないね」

何がだらう。見た目がだらうか。

「茂君。この学校には慣れれた？」

「俺が転校してきたつて知つてるんですか？」

「まあね。登校する生徒の顔は把握してるし……その様子だとあまり友人に恵まれてなかつたりする？」

やはり、屋上で一人こんなところで弁当を食べている自分は端から見れば孤独な少年にか見えないだろう。事実そうだ。

「大丈夫。仲間はまだまだたくさんいるよ」

励ましてくれているんだろうか。別にいいのに。だがどこか信じる気持ちになれる。不思議な気分だ。希望のようなものが芽生えてくる。

「ありがとうございます。もう時間だし、そろそろいかないと」

「明日もきてよ。一緒に話したいし」

女子にこんなことをいつてもらえたのははじめての経験だった。

その日の午後はずつとほんやりと薫という生徒のことだけ考えていた。隣にいる奈央のことも気にならなかつた。話しかけてうざいと思われるような女子はいないと思つたほうがいいし、実際に茂は奈央のことが気にならなくなつた。

明日も屋上で薫さんとランチを取りたいなと茂は夢想にふけつた。夢想は現実となつた。

次の日、屋上に向かう。ひょつとしたら薫はいないかもしれない。孤独な自分が創つた妄想かもしれないし、からかわれただけかもしれない。

だが階段を上がり屋上につくと薫は確かにそこにいて、待つていたかのように茂に手を振つた。茂は嬉しかつた。

「ランチと一緒にと思って」

「食事はいいよ。でも一緒にいろいろ話そう」

とはいへ、何を話そうか？ しかし話題に及ぶことはなかつた。薫は学校のことに詳しく述べ、いろいろな情報を茂に教えてくれた。茂は自分の近況を語つた。それは薫には楽しいものらしく、熱心に聞き入つていた。しかし楽しい時間は短いもので、実際に昼休憩は短いものだつた。

「もういくよ。最後に一つ質問があるんだけど。この学校に最近幽霊がいるらしいんだって。みんな噂してるみたい。何か知ってる？」

「幽霊なら」の学校には格好の場所だよね
じつこつことだらう。茂は首をかしげた。

「」の学校はね、そういうものを引き寄せてしまつといひなの。茂
君は気をつけてね。敏感な人だから

茂にはますますわからない。

「俺は靈感があるってこと?」

「あるよ。強い靈感が」

そういうと薫は茂の右手を両手で握った。茂は困惑を感じを覚えた。
「だからね、」の学校には君が必要なの」

「よくわからないんですけど」

「すぐにわかるよ。君は普通とは違つ」

薫の顔はどこか同情してくるようでもあり、何かを憂いでいるよ
うでもあった。

「君はこれからまあまな試練を受けると思つ。その試練の一つが、
そろそろ始まるんぢやないかな」

「試練……それは幽霊と関係があるの?」

薫はにっこりとして、それ以上何もいわなかつた。

「またきてね」

?

次の日は大雨だった。これでは屋上にはいけないだろ？午前中に降り止んだとしても床が濡れて座れない。薰もこないだろ。
憂鬱にしていると、奈央が珍しく話しかけてきた。

「幽靈見た？」

「見ないよ」

「あんたって幽靈なんじやないの？　あたしにしか見えない
無視するか、反論するか。

「お前が幽靈なんじやないの？」

「いっちはほかの人には見えるもの。あんた、誰とも喋らないじや
ん。見えてないんじやないの？　実は自殺して校内をつらつく自縛
靈かもよ」

奈央のくだらない言葉をいちいち否定することはたやすいが、そ
んなことをしたら向いの思う壺なのでそれを避けた。別な方法で
攻めることにした。

「奈央って俺のことが好きなの？」

「馬鹿じやないの」

奈央の返事は驚くほど冷めていた。

鬱陶しいので教室を離れて廊下を意味もなくうろつく。すれ違う
可愛い同級生の少女たちはこちらを気にもしない。全く、寂しいこ
とだ。

ちょうど僕してきたのでトイレに入った。ズボンのジッパーを下
げ小さく縮まつた陰茎を取り出し、小水を便器に流す。先ほどの奈
央の態度が思い出される。くだらない会話だったが、妙に腹が立つ。
あのアマ、と心の中で憎憎しく罵る。

手を洗つてトイレを出る。教室に戻ろうとするとき茂は妙な違和に
気づいた。

静かだ。廊下は、無音の静寂に包まれていた。何の気配もない。

まるで茂一人だけがこの世界にいるような感覚になるほどに。

移動教室？いや、全校集会かなにかだ。どの教室にも生徒の声が聞こえない。周囲を探つても、誰の姿もない。おかしい。やはり全校集会だ。みんな体育館に集まつて体育座りだ。

全校集会なんて話は聞いてなかつたぞ。嫌な感じだ。誰も彼もが自分の敵みたいだ。茂は一人、暗い考えに浸つていた。

なんだか本当に妙だなと思つてきた。おかしい。何がおかしいのか。再び周囲を見渡す。やはりおかしい。何がおかしい？

静かすぎるということだ。あまりにも。あまりにも静か過ぎる。なんというか……空間が、普通ではない気がする。落ち着いた静かさとは違う、何か異質な空気が辺りを漂つてついている気がしてならない。

どうなつてる？

廊下の奥に女生徒が見えた。セーラー服だから当然女生徒だ。女だとわかる程度の髪の長さ。肩まで伸びているというわけではない。女生徒が一人いたからといって不安な気分は消えなかつた。女の顔は遠すぎてわからない。しかしこちらに近づいてくるのはわかつた。

あつと茂は口を開けた。女生徒の顔はなかつた。のっぺらぼうのように。女は茂に向かつて歩き出した。
近づいてくる。逃げるべきだろつか。悪寒が走る。どうするか。女はだんだんと近づいてくる。

女の何もない顔から口が出現した。口はにやりと曲がつていた。とりあえず茂は女に背を向けて逃げ出した。教室には戻らずに一階へ。一階の前に女がいて、今度は口だけでなく鼻もあつた。次は目玉かと茂は上に駆け上がるときについた。一階に戻る。女の笑い声が聞こえる。茂にはそれが嘲笑に聞こえた。無様に逃げ惑つ自分に対するあざけりの笑い。

嫌な汗が出てくる。頭が冷静でいられない。どうするどうする？くそつ、何で俺がこんな目に。

屋上だ。茂は思った。屋上にいくべきだ。こんな薄暗い場所では発狂してしまつ。屋上に向かつ。恐怖を断ち切るよつに茂は走つた。背後から何かが駆ける音が聞こえる。一瞬振り向く。女が両手を前に突き出しながら向かってきていた。気持ちの悪い光景だった。女には両田が出現していた。その田には混沌と狂氣が混ざり合ひ、さらには邪悪な、言葉にできない惡意に満ちていた。

捕まつたら命はないと茂は思い込んだ。あれは化け物だ。全速力で駆け、三階へ。猛スピードで階段を駆け上がる音が背後から聞こえてくる。

屋上の扉を開け、十段ほどの階段を上かる。屋上は普通だつた。雨が降つていて空はどんよりしている。車の走る音が聞こえ、空には雨の中でも鳥が飛んでいる。雨が降つているだけの、平凡で日常的な風景だ。服が濡れるが茂は気がつかなかつた。

振りかえる。階段下の扉の向こうで、扉の前で茂を睨みつける女生徒の姿があつた。

茂は思わず悲鳴を上げてしまいそうになつた。扉の前にへばりつくものは扉を開ける気配を見せない。

「正解だよ」

声がした。まさかと茂は思った。それは薫の声だ。声のしたほうを見る。

薫がいた。

「薫さん」ほつとするが、危機はまだ去つていない。

「あいつは大丈夫。ここにはこれないから」

「薫さんだけ何でここに？ ほかの生徒たちがどこにもいなのはどういうわけなの」茂は質問を連発する。

薫は困つた顔をした。

「とにかく今はあいつをなんとかしないと」

音がする。あいつがきたのだ。

薰に、化け物がぶつかつしていく。

「薫さん！」

?

学校を休むといつに何か意味があるだらうかとその日の終わりにベッドの上で考える。登校拒否をしたら両親が心配するだらう。それはできない。だがどうすればいいだらう。こんな超現実的な恐怖に自分が遭遇するとは考えたこともなかつた。

いや、考えたこともなかつたというのは嘘だ。退屈なとき、ときには幽靈に出くわすのも悪くないという考えに浸つたときがある。本当に怖いのは孤独だから。そう思つてた。しかし靈に目をつけられるというのは似たような恐怖らしい。

この奇怪で、人に救いを求めるのも難しそうな状況を打破する術はあるだろうか。何かあるはずだ。

ふと思い当たつた。あの非現実的な状況で屋上に向かつたとき、薫に会つた。そして、薫は靈と……靈を追い払つた？ わからないが、自分が今こうして無事にいるのは薫のおかげだだらうと思つた。薫はいつたい何者なんだろう。なぜあんな場所にいたんだろう。大雨だつたのに。

明日、薫に直接聞いてみよう。もしかしたら学園に詳しい薫は全てを知つてゐるかもしれない。

「負けないぞ」茂は咳き、心の中の恐怖を追い出そうとした。今日はもう寝よう。電気を消して目を閉じる。暗闇の中で女生徒の化け物を思い出す。再び電気をつける。今日はこのままで寝よう。

次の日のホームルーム前に蓮華が話しかけてきた。

「知つてるか？ 何でも石原百合子が行方不明らしいぜ」

「誰それ」石原百合子なる人物のことを知らない茂はそう尋ねた。

「同じクラスのだよ。生徒会で会計をしてた。昨日学校に残つて生徒会の仕事をしてたらしいけど、忽然といなくなつたらしい。鞄があるのに、百合子の姿がどこにも見えないらしい」

「マジかよ」百合子という生徒のことは知らないが、顔を覚えてないということはさほど派手な容姿ではないのだろう。生徒が行方不明になるというのは大変な事件だ。行方不明というだけで大事なのに、これが痛ましい事件となつたら……。

「当てはないのかよ？」

「わからない。友達も生徒会も親も教員もさっぱりだつてさ

「ずいぶん詳しいな」

「みんなの噂を総合しただけ」

なるほど。ほかの生徒たちがいつも以上に騒々しいのはそういうことだつたのか。

「百合子はさ、地味だけどいやつなんだ。あいつに何があつたら俺、ちょっと悲しいかな……」

蓮華はしんみりした様子を見せ、茂はどう返事をしていいのかわからなかつた。

「きっと大丈夫だよ。警察も必死に探してるだろ? しね
『だといいけどな。警察なんてあんまり当てにならないから』

蓮華は自分の席に戻つていいく。

茂は神妙な気分だつた。今日も外は雨で、暗い気持ちになります拍車がかかつた。

石原小百合という生徒は行方不明になつた。それは、もしかすると昨日の現象と何か関係があるのではないか。関連付けをする理由はタイミングのよさだけだが、茂には関連があるという自信があつた。それだけに余計に不安になる。恐ろしい考えばかりが頭をよぎる。

窓の外は雨。早く止んでほしい。今日は屋上にいきたい。薰さんに会いたい。会わないと。

茂の願いが叶つたのか、雨は一時限目の途中で降り止み、日本晴れとなつた。天気が変わつただけで鬱屈な気持ちが少し晴れた気がした。

昼休みになるとすぐに屋上へ。そういうえば奈央と一言を交わしていないかなと思ったが、どうでもよかつた。何でみんなクソ女のことが気になるのか、自分でも不思議だった。顔がいいというのは、それだけで男を否が応でも惹きつけるものらしい。腹立たしいことだ。屋上にいくと薰がいた。薰さん！ 茂が駆けると、薰の隣に誰かいることに気づいた。男だった。茂は動転して声を掛けられなかつた。

「あ、茂君」薰が気づいた。

男が茂を見る。それはこの前すれ違いになつた不良生徒だった。「おお、お前か」男はどことなく親しみを込めた様子で茂に声をかけた。

「ああ」茂はどういっていいかわからずにつつ答えた。頭の中はなぜこいつがいるのかという思いでいっぱいだった。

「この前話した章吾君。初対面だつけ？ 彼も君と似てる人だから、仲良くしてね。友達少ない同志、いいでしょ」

「お前にいわれたくねえな」章吾といわれた金髪の男子生徒は薰をにらみつけた。そして茂を見た。「お前茂つていうのか。俺は章吾。あまがさき尼崎章吾な。同じ一年なんだろ。俺はD組だから。よろしくな」よろしくつていつたいどういうことだろうか。これからこいつと友達になるつてことなんだろうか。茂にはさっぱりだつた。しかし挨拶をされた以上、こちらもするべきだ。

「Bクラスにいる佐藤茂。転校ってきて日が浅いけどよろしく」

「転校生か。お前たぶん運が悪いんだ。きっとそうだ」「一体どういうことだらうか。茂は首を捻つた。

「まあいいや。よろしくな」

「転校してきたばかりで親しい人間はそこの薰さんくらいだから、仲良くしてくれると嬉しいよ」茂は自分でも驚くほど饒舌にしゃべつていることに驚いた。どうやら自分は思つていたより社交性が高いのかもしねない。

「じゃあ二人は友達つてことで！」

薫が一人の背中を叩いた。かなり痛かった。

「あたしちょと向こうにいるね」

「薰は向こうにいつてしまつた。いきなり不良と一人きりにされて

茂はどうしていいかわからない。

章吾はじろりと茂をにらみ付けた。

「お前……見たんだろ?」

「見たって、何を?」

「幽霊をだよ」

なぜこいつがそんなことを知っているんだろう。

「全部薰から聞いた」

茂は薰のほうを見ようとしたが、薰はこいつの間にかいなくなつて
いた。

「あれ?」

「あいつはしづばらく出でこないだろ」

「どうこつ」と……薰さんて何者なの?」

「白縛靈だよ。」の屋上限定の

?

じばりべ頭の中が混沌としていた。そして、段々と今までの「」
に合点がいき、なるほどなと納得した。薫が靈なら、あのときの不
思議な現象も受け入れることができるかもしない。
しかしそれにしても……薫が幽靈なんて。俄かには信じられない
が、おそらくそれは事実。現に今そこにいたはずの薫は影も形もない。

「屋上の幽靈つてのは薫さんのことだったんだ」「

「そうだ。それを見えるほど靈感がある人間は少ない。ましてや日常会話をできるなんてのは俺や瑠香くらいだと思つた。だけど、お前も相当靈感が強いみたいだな」

「薫さんはどうして白縛靈なんかに？」

章吾は首を振つた。「俺も知らねえ。あんまり聞くと悪いと思つてな。でもあいつはいい靈だ。お前が会つた靈みたいに邪惡じやない。お前だって薫に守られたんだろう？」

「そうだ。あのとき屋上にいき、彼女が雨の中にいた。どういうふうにかはわからないが、薫が守つてくれたと想えていいのだひつ。「俺が遭遇したあの靈。いつたいどうこう存在かわからない。惡靈？」

？」

「まあ、いつてしまえば惡靈だな。それも極めて性質が悪い靈だ。やつは最近出没し始めた。俺は気づいた。薫以外に変なやつがいるつてな。一回襲われた。なんとか逃げたけどな。かなり危険だと思う。自縛靈じゃないのに、この学校から離れない。あいつがいる限り今回みたいな行方不明事件はおき続けるだろつな」

「石原百合子のことかな。あれもその靈の仕業だと？」

「だと思つ。薫もそうだと言つてゐるし」

いつの間にか隣に薫がいて、茂は妙に驚いた。彼女の肌はどう見ても生氣のある人間のそれだ。瑞々しい若い体。豊満な胸。たまら

ない。なぜ彼女は靈なのだ？」「

「話は大体済んだ？」

「ああ。後はお前からいっててくれ。俺はちょっと用があるから教室に戻る。またな」

章吾は屋上から出て行った。

残された茂は沈思黙考し、この特異な状況を整理した。薰は靈で、章吾と自分は靈感体质で、邪惡な靈が校内にいる。

邪惡な靈は白石小百合を行方不明にした。だとしたら、これから先も行方不明者がいるということか。恐ろしい。

「薰さんは靈なの？」茂は单刀直入に聞いた。

「そうだよ」薰は微笑みを浮かべながらそう答えたが、どこか憂いがあった。

「薰さんが靈なんて、全然気づかなかつた。だつてどう見ても人間だもん」

「あたしは靈になつてもう十年くらい経つ。たぶん、やりかけたことがあるからここから出られないんだと思う」

「やりかけたことって？」

薰は悲しそうな顔をする。「わからない。だけどたぶん、屋上で飛び降り自殺したんだと思つ」

飛び降り自殺。こんなに明るい少女が、自殺なんてするんだろうか。だけど人間はわからないものだから、そういうこともあるのかもしれない。

「薰さんが飛び降りなんてすることは思えないけどな」

「死んだときの記憶はないの。気づいたらここにいて、この屋上から出ることはできない。だから、たぶん死因は何であれ、屋上に関連しているということは間違いないと思うのね」

茂はその推理には同意だつた。薰は屋上に縛られて動けないのだ。死んだ場所が屋上なのは間違いないだろう。

茂は話題を変えることにした。今、話さなくてはならない問題だ。

「あの悪靈のことだけ、いったい何が目的なの？」

薰はため息をついた。何かもかもが全く人間同様だ。彼女は本当に靈なのか？

「靈のあたしだって同じ靈の相手のことはさっぱりだよ。だけどね、相手の怨念がすごい強いてことはわかる。屋上にいるから外の世界の靈のことはよくわからないけど、あの靈は危険だよ。行方不明にされた彼女も、あの靈によつてすでに……」

「すでに？」その先は聞きたくなかった。

「やめとくよ。少し忠告ね。見えない世界に注意して。茂君ならたぶん見えてしまうから。靈はそこに連れ込もうとしてると思う。あの靈にあつたらすぐに逃げて。ここにくるのもいいけど、必ず守つてあげれる保証はないからね。それから仲間を集めて。君と章吾君だけじゃ心もとないから。もっと見える人が必要になると思う。予想だけど、君ならたぶん同じ種類の仲間が集まると思う。あいつは、たぶん見える君や章吾君を狙うと思う。気をつけてね」

頭がくらくらする。薰の忠告は、恐ろしかった。これから先、再び昨日のようなことになるかもしない。またあんな目にあつたら、今度こそ駄目かもしれない。

?

次の日の朝、体育館で緊急集会が開かれた。校長が生徒全員の前に立ち、白石小百合が行方不明で、依然として捜索中だと発表した。何者かが誘拐したという可能性も高く、帰宅のさいは必ず複数で帰るようになると申し出があり、可能なら親御さんに送り迎えしてもらつほうがいいとも言った。

しかし相手が靈なら、登下校の際の注意は無意味だ。事件は校内で起きてるのだから。

授業中、茂は今後の対策を考えたが、何も思いつかなかつた。薰の忠告を思い出している。仲間を集め、か。章吾のほかにも靈が見える生徒がこの学園にいるのだろうか。いるとしたらその生徒をどうやって見つけ出せばいいのやら。

とりあえず章吾と話す必要があると茂は思った。章吾はロクラスだ。休憩になつたら章吾の下に向かおつ。

休憩になるとロクラスへ向かつた。どの生徒も白石小百合が行方不明になつたことの話をしている。行方不明という衝撃的な事件があきればそうなるだろう。だがそれはまだまだ続くかもしれない。章吾はいた。席で寝ている。別の教室のクラスに入つたことがないからどこか緊張する。意を決して章吾の下に向かう。

「転校生じやねえか！」

誰かが茂の肩を叩いた。

見知らぬ生徒が数人、ものめずらしいものでも見るかのように茂を取り囲んだ。

「どこから引っ越してきたんだよ」見知らぬ生徒がいやに馴れ馴れしく尋ねてくる。

「神奈川だよ」茂は素直に答えた。

「都会だ！ こつちは田舎だから退屈じやねえか？」

「そんなことないよ」

「そう？　俺は古谷正樹。よろしく」

「よろしく」

からかわれたのかと思ったが、友好的なようだった。飄々とした雰囲気がある。どうも面白そうなタイプのやつそうだ。

「転校生、クールだな」数人のうちに一人が笑った。

「さすが転校生だけあるぜ」

どうもこの場にいづらじ。ここには退散したほつがよもそつだ。章吾とはまた別のときにコンタクトを取ろう。茂は逃げるようになんて云ふのがちがうんだよなあ。その場を去つた。

待つて。

声がした。普通の声じゃない。脳の中に直接響いてくるよつた声。すでに廊下に出ていた茂だが、立ち止まって今いたクラスの様子を眺めた。先ほど話した連中はではない。声は女の子の声だつた。

氣のせいかなと歩き出すと背後から足音が聞こえた。振り返ると、長い黒髪の女生徒が立っていた。

「あなた、章吾君に用があつたんでしょう？」

「何でわかったの？」

「あたしはね、そういうことがわかる子なの。他人の心を読めるのはほんの少しだけね」

廊下には他の生徒たちもいて、賑やかだつた。茂は真剣な顔で話す彼女にどう対応すればいいのかわからない。

「俺の心を読んだ？　テレパシーでも使えるの？」

「冗談でいつたんだろうけど、実はそうなの。あたしはテレパシーが使える。それに靈感もある。薫のことももちろん知ってるし、省吾とはそっちの方面の仲間もあるの」

「へえ」

「君、幽霊に襲われたんでしょ？」

「詳しいね」

「化け物だよ、あの連中は。この世界はね、闇の部分が多いから。

幽霊だけじゃない。化け物の宝庫なんだから。特にこの金須野つて
いう町はそうなの

「なんだ」

「あたしは味方だよ、佐藤茂君。省吾と同じように頼つていこう。
あたしは芳賀瑠香。よろしくね」

握手を求めてきたので茂はそれに応じた。

背後に男子生徒が現れた。先ほど話しかけてきた男子連中の一人
だ。名前を名乗ったな。古谷正樹といったつけ。

「芳賀、何してるんだよ。転校生をいじめんなよ」

「あたしは転校生と親睦を深めてるの。部外者はあっちへいってよ」

「はいはい」

古谷は教室に戻つていった。

「あいつには気をつけて」

「え？」

「あいつの心の中を見ることができないの。もしかしたら、普通の
人間じゃないかもしね」

「そつの」なんだかついていけない。

「じゃあまた。昼休みにでも会おうよ、屋上でね」

彼女は教室に戻つていく。茂は今の流れについていけず、教室に
戻つて頭を落ち着けることにした。

?

昼休憩に屋上に赴くと先ほどの女生徒芳賀瑠香と章吾がいた。薰もいる。

「こんちは」芳賀が慌てて挨拶をしてきた。

「どうも」

「今ちゅうじ話しあつてたんだよ。茂君」薰が叫ぶ。

「何をですか？」

「俺たちで悪靈退治をする方法だよ」と章吾。

靈か。悪靈なんて存在しないと思つていた。今までには。だけどこの人達はそれが存在するということを理解していく、そしてそれを退治しようとしている。ゴーストハンターか。

「面白そうだ」

「よく言った」

章吾が立ち上がって茂の肩を叩いた。強い力で、貧弱な茂は少しよろけた。

「お前、肉食つたほうがいいぞ。靈より軽いぞ」

靈に体重なんてあるのだろうかと茂は思つ。

「それで、どうやって靈を退治するのさ？」

「あたしたちは靈に対し干渉できる力を持つてゐるだろ」瑠香が言つ。

「そうなの？」

「そうだよ。それを使って、あいつをやつつけるんだ」

「俺たちは今まで靈を自力で退治してきたんだからな」

「俺はそんな力ないよ」

「知らないだけだ。教えてやるよ。低級靈を退治するやり方をや」

「靈の戦い方？」茂は首をかしげた。

放課後。秋の空の下、茂たちは金須野ではもっと人通りの多い繁

華街を歩いていた。それからそこを超えて、人通りの少ない寂れた場所についた。

「ここで何をするというのだろうと茂は半ば緊張して一人の挙動を見守った。場所は人気がないとはいえ、民家が密集しているような場所だ。ここで本当に幽霊退治のようなことをするのだろうか。それは一体どうやって……。」

「いるか？」

「わからない。あ、ちょっと反応があるね。薄いけど、その角にいる」

瑠香と章吾が道路の右へ曲がったので茂がついていくと、その先にうつすらとした存在がいた。

たまに見るものの一つ。ぼんやりとした影。

「すつごい低級だ。実体を伴わない」章吾が言つ。

「影の状態だもの。これからどう転ぶかわからない。とにかく茂君、これが見えるでしょ？」

瑠香がぼんやりした影を指さすので茂はうなずいた。

「たまに見てるんでしょ？ 不思議だ。よく今まで実害がなく生きていけたね。運がよかつたのかな」

「いやあ、鈍感力って大事だよな。意識しないと向こうも簡単には手出しあしないだろうし。憑かれるつていう経験がないんだろうな。そういう人間はよくいるし」

「で、あれをどうするつていうの？」

「消すんだ。念を込めて。やってみろよ」

茂は章吾に押されて低級靈と言わた影のよななものに近付いた。ぼんやりとした影は一般人には見えないもので、その場に止まっているようで実はゆっくりと移動している。茂にはわかる。向こうはこちらに気づいている。これが本当に意志を持つた存在なのか茂にはわからないが、直感で、これが自分に敵意を持っていると感じた。

「どうすればいいの！」茂は後退する。

「念じるんだ！ そいつに強い気を送れ。相手を消すような気持ちだ」

章吾はそう言つが、茂にはよくわからない。

「まずそいつの中に腕をつっこんで。そして、相手から伝わる負の感覚に打ち勝とうとするの」

茂はよくわからないまま、影の中に腕を入れてみた。

軽い不快感。これが負の感覚という奴だらうか。嫌な感じだ。なんだか気分が滅入つてくる。だが軽いものだ。例えるなら授業中に教師に怒鳴られて落ち込んだときのような。こんなものなら、耐えることはできる。いや、耐えてどうするといつのだらう。そうだ。この不快感を取り除こうとすればいいんだ。やり方はよくわからぬが、気合いだ。茂は目を閉じて、なるべくいいことを考えて、そして靈なんて消えちまえという思いを強めてみた。

「影が揺らいでいる。いいぞ、その調子だ」

背後から章吾の声。効いているのだろうか。もつと強く念じればいいのだろうか。茂は陽の感覚を強めようと努力し、さらに激しく相手を消し去ろうこう気持ちを強く込めた。

何かがぶつりと切れるような音がしたと思つと、一瞬、蒸発するような音と共に小さな悲鳴が聞こえた。虫の悲鳴のような小さなものだったが、茂は目を開けた。陽炎はすでになくなっていた。

「やつつけたの？」

「そうだ。お前が倒した。やつぱり素質あるよ、こいつ。低級とはいえ、やつつけた」

「あんなの見える人なら誰でもできるつて。あたし達は数少ない見える人 いつてしまえばエリートなんだから」

「エリート？ 変人の間違いじゃねえの？」

「あんたもね」

「俺たちが、だ。こんなことしてると俺たちは端から見ればただの人だ」

「見た目の割に客観的なことが言えるんだ。でもいいじゃん。周り

の連中なんて、自分が魑魅の類に狙われてる」とも、憑かれてることも知らないんだから

「だからよお、俺たちが守つてやればいいんじゃね?」

ひんやりとした秋の風が流れた。

茂は自分の手を見た。普通だ。特に異常はなさそうだ。

幽霊を退治したようだが、ずいぶんとあつたりとしたものだ。実感がない。だけど、やつたのだ。誇つていいのだろうか。普通とは違うことをしたのだ。見えるだけじゃない。茂は心中に強い高揚感が募るのを感じた。見えるだけじゃない。これまでとは違うことをしたのだ。

「守るか……。いいね。エリートは凡人を守らないと」

「そうだろ」

「章吾つて不良のくせに面白いね」

「馬鹿、俺は不良じやねえよ。見た目で判断するなよな」

瑠香が笑う中、茂は自分自身に感動していた。

「というわけで、後は訓練だ。心を強くしろ。敵のマイナスの氣に当たられて弱氣になるな。逆にこっちの強い氣をぶちこんでやればいい。影の弱い強いは見た目で判断しろ。実体化してゐる影は手強いでし、お前ならたぶん逆に取り憑かれる。後が大変だから徐々にコツを掴んでからにしろよ。やっぱそうだと感じたらすぐ逃げろ。低級なら動きも遅いから取り憑かれない限り逃げれるはずだ。じゃあな。気をつけろよ。なんかあつたら電話しろ」

章吾と瑠香から携帯電話の番号を教わり、三人とはそこで別れた。「あいつ早速靈退治するぜ」章吾は茂に聞こえないように瑠香に言ったようだが茂には聞こえていた。

茂はその通り、早速別の低級靈を探すことにした。こここの場所はいいのかもしれないが、あまり知らない場所だ。あんな存在が勝手知つたるこの町に無数も存在するなんて。茂は信じられない思いだつた。意識しないと、見方を変えないと、見られないものというのがあるのかもしねえ。

茂は場所をえることにした。なるべく家に近い方がいいな。
電車で家の近くまで向かい、近所の公園周辺をうろつぐ。不審者
だと思われなければいいが。

白い人影のような存在が揺らめいている。茂はラッキーだと思った。こうも早く探していたものに会えるとは。早速茂は影に近付いた。人影は本当に人の形をしていて、シリエットのようだ。茂は近くにつれ恐ろしくなつた。実体化するほど靈は強力だという。これはまだ影のようだが、先ほど影よりも危険な感じがする。

茂は躊躇する。逡巡した後、とりあえず先送りにすることにした。これだけあつさり見つかったのなら他にも影はいるはずだ。それらを探してみよう。

結局、二回の収穫があった。どちらもおぼろげな影で、簡単に消し去ることができた。三回目を狙おうと歩いていたら気分が悪くなつたのですぐに帰宅し、風呂に入り食事をとると早々に寝た。起きると気分はすっかりよくなつていた。

教室につくとクラスメイトが相変わらず賑わつてゐる。そんな喧噪もあまり気にならない。茂の気分はよかつた。

席につく。隣の奈央は携帯電話をいじつてゐる。

「おはよう

茂の挨拶は届いたのだろうか。返事はなかつた。

ため息をつく。まあいい。いつものことだ。

ちらりとこちらを見た気がした。氣のせいだろうか。どちらせよ会話にはならないだらう。茂は奈央と話がしたかった。彼女のことが好きになつていて。愛くるしい瞳を見ながら会話をするだけで心が安らぎ、幸せな気分になると共に彼女の唇に唇を重ねたいという気持ちが湧いてくる。

もしかしたらそういう下心がわかつたから、警戒されたのかもしない。だとしたらすぐ恥ずかしい。

茂は顔に自信がない。いかにも普通という顔なので、自分が女にもてるとは思つていながら、しかし、それにしても隣の女子は自分を嫌いすぎではと思つ。

まあいいや。所詮女は顔がいい男が好きなんだ。幽霊だけど、薰のほうがずっと自分を親しんでくれる。生身でないのが残念だ。本当に残念だ。あんな素晴らしい顔と体をしてゐるのに。

本当に幽霊なんだろうか？ なんとなく、まだ幽霊であるということを認めたくないという気持ちが茂の中にはあつた。

チャイムとほぼ同時に教師がきた。ホームルームを終わらせると入れ違いに一時限目の授業である世界史の教師がきた。

毎までは孤独だ。

?

昼休憩に屋上へいくと章吾と瑠香がいた。薰もいたが、彼女は手すりの上に立つていて、茂はもう少し声を上げそつになつた。とつさに彼女が靈だということを思い出した。

「くると思った」薰が言った。

「ここしか居場所がないんでね」

そんなところにいたら下を通る人間にパンツが見えるのではない
かと思ったが、一般人には見えないのだから問題なのだろう。茂は
思う。服も靈体の一部なのだろうか。靈体というのは体以外にも含
まれるのだろうか。くだらない疑問かもしれない。しかし不思議だ。
弁当を広げ、食事を始める。

「昨日あれから他の靈もやつつけたのか？」章吾の質問だ。

「うん。一回退治したら気分悪くなつたからやめたけど」

「あいつらの負の力に当たられたんだよ」

瑠香が言ひ。彼女は食堂で買ったパンとサラダだけだ。少し寂し
いが、何かわけてやるべきだらうか。

ところでこの瑠香という女生徒は前も思つたが、それなりに可愛
い。ちよつとお姉さんの雰囲気が、魅力的な顔立ちをしている。
ちよつとヤンキー風だが。背は高く、薰よりもありそつだ。つまり
茂よりも高いということ。

「早いところ茂をそれなりの靈能力者にしないといけないよな」

「そうだね。今日も訓練だね」

「俺は構わないよ」

「勿論だ。お前が早いところ育たないと学校の生徒はまた減るかも
しれないからな」

章吾の口は本氣だつた。おそらく、嘘ではない。石原百合子は行
方不明になつた。茂が遭遇した靈が原因なら……あの化け物がまだ
学校をうろついているのなら、次の犠牲者が出てもおかしくない。

「行方不明になつた女子は生きるのかな」茂が疑問をぼそりとうと、場の空氣に冷たいものが走つた。

「それは答えられないな」

やがて、章吾が言つた。

「希望を持つのは悪くないよ」瑠香は言つが、その顔は決して希望を持つている者の顔ではない。

彼らは靈のことを自分よりよく知つていると茂は思つ。行方不明になつた白石百合子がどうなつてゐるのか、薄々察してゐるのかもしない。

「どうすればあの靈を退治できる?」

「お前次第」章吾が答えた。

靈退治の一日常。場所は昨日と同じ、陰鬱な住宅地。枯れ木に鴉が止まつてゐるような場所だ。見るからに靈がいそうではある。

歩き回ることもなくぼんやりとした白い影が現れた。発光してゐるその存在はワンピースを着てゐる長い髪の女に見える。

「あれは恨みが強そうだ」茂が言つた。

「恨み? 違うな。恨みなんて靈には関係ない。あいつらは人に取り憑き、その人間の性質を真似ていく。恨みなんて関係ない」

「でも、生前に強い恨みを持つた人が死んで……」

「そんな話は眉唾だ。今までの靈に対する考えは捨てろ。俺たちのいう靈つていうのは、唐突に発生し、人に取り憑いて段々と力を増していく、しまいには面倒な存在になるつていう厄介なもののことだ。姿形も様々。全て取り憑いた者に影響するんだ」

「それじゃ、俺たちの目の前にいるあれは……?」

「取り憑いていた人間によつて構築された姿だ。別にあいつが生前ワンピースを着ていた女の靈つてわけじゃない」

この男、靈媒師達を完全否定しやがつた。茂は驚いた。章吾といふ男はよく知つてゐる。見た目はただの不良なのに。喋り方も全然不良臭くない。もつと阿呆つぽくいいのに。悔しい。こいつ、自

分より頭がいいのではないだろうか。

ところで田の前の存在はゆっくりとこちらに移動してきているので、茂は近付いてくるにつれて緊張していた。見たところ昨日相手したような靈とは違う。もつとずっと手強そうだ。顔の輪郭が見える。はつきりとはしないが、田鼻口があるのがわかる。

「こちらに近付いてくるはどうしてだろう。俺に取り憑こうというのだろうか。そうであろう。彼らはそれしかない。取り憑かれるどぞうなるのだろう。やはり段々とやつれしていくのだろうか。寄生虫のよくな奴らだ。

意を決し、茂は近付いてきた靈に右手を突っ込んだ。見た目は昨日の靈よりはつきりしているが手に何かが触れたという感覚はなかった。

嫌な感覚が右手を通りして全身に伝わってくる。負のオーラというやつのだわ。これを長時間続ければ、吐いて倒れてしまいそうだ。

相手を霧散させるような強力な氣を送り込むようなイメージ。昨日のでだいぶ感覺が掴んできている。だがそれを送り込んでいくときに、茂の体は限界を感じた。茂は右手を引っ込め、後退した。

「判断はいいね。そういう大事よ」瑠香が言った。

「だけじゃんなのに手こするよつじやまだまだだ。ちょっとビィてろ」

章吾が茂を押しのけ、靈に対しても出した。そして章吾が「消えろ」と言つと、靈は奇妙な悲鳴を一瞬だけ上げ、霧散した。

「消えた」茂は呆然と呟いた。

章吾が振り返る。

「スマートだろ?」

「章吾がやつたのを説明するとね、章吾は言葉を使うとより自分の力が高められるの。暗示的なものかな。あたしはわからないけど。変だよね」

「お前のテレパシーのほうがずっと普通じゃないけどな。まあ、今

のは一例だ。俺はお前よりも靈をずっと退治してたから、あの程度ではちよつと氣を送り込めば余裕なんだ。お前はまだもう少し弱い奴で練習かな

なんだろう。靈つてこういう訓練に使われるような存在なのかな。
茂は少し靈に同情する。

しかし悔しい。というよりもずるい。茂は不満を感じた。

「なんだよ、一人ともずっと前から靈退治とかしてたんだろ？ 俺が今のに敵わなくとも仕方ないじゃん。経験少ないんだから

「そうだな。気にすんな。別の弱いの探そう」

釈然としない。こんなにも差があるなんて。何故彼らは靈を退治してきた過去なんてもつているのだろうか。普通は能力があつてもそんな機会は訪れないはずなのに。今度聞いてみようか。

一匹目もすぐに現れた。薄い亡靈めいた存在だが、これは靈であつて、一般で言われてるような靈という存在ではない。というよりも、誤解された解釈をなされた者だ。

だが実害はあるので、退治する必要は、あるのだ。

靈を破滅させる力をもつこの右手……普段は普通の手だが、ひとたび力を込めれば、自らをも滅ぼしかねない諸刃の刃と化す……。そんな想像をしつつ、茂は靈に近付き、その右手を靈の内部に直接入れた。

激しい不快感に茂は思わず手を引っ込める。

影のような靈は、茂に恐怖を与えた。目を見せたのだ。二つの憎々しげな目を見て、茂は思わず後ずさつた。

章吾の背中が茂の視界をふさぎ、靈を見えなくした。

「まだ危ない相手だろ」

だが茂は苛立っていた。靈にも、章吾にも、自分にも。怒りにより茂は恐怖を払拭した。

茂は章吾を退かせた。

「おい

「下がつてくれ。俺の獲物だぞ」

茂は再び靈に手を突っ込んだ。強烈な不快感に吐き気がこみ上げてくる。

嫌な気分になる。だがこれは精神的なものだ。肉体的なものではない。そもそも思うが、耐え難いものだった。

橋奈央の顔が出てくる。まるで死ねばいいのにという顔で、彼女は茂を見る。それが茂にはたまらなく悲しくさせる。

だが、そんなことはいつものことだ。これからだ。これから彼女と親しくなつてみせる。可愛いと思えた女だ。いざれ恍惚の表情を浮かべさせてみせる。俺色に染めてやるぜ。くそつと茂は欲情を抑える。むらむらしてきた。

そんなことを思つてゐるのが結果的にマイナスをプラスに変えたのかもしれない。靈は破裂し、霧散した。

「おお」章吾が背後で拍手している。

「駄目かと思ったよ」瑠香も拍手する。

茂は振り返り、親指を立てて見せたが、体がふらつき、態勢が崩れた。章吾が茂を支える。

「ちょっと負荷がかかったみたいだな……まだお前には早い相手だつたよ」

「でも俺、レベルアップしたろ?」

「死んだら何にもならないからね」瑠香が優しく茂の髪を撫でた。少し強気な印象のある彼女だったが、茂はその印象を変えた。実に女性らしい穏やかで聖母のように優しげな表情だ。一日や二日でその人のことなんてわかるわけがない。彼女も色々な面を持っているのだろう。

「今日はこれまでにじよつ」章吾が言った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5009y/>

学園レイ

2011年11月23日20時46分発行